

ありがとうと言える子どもを育てる

生きもののいのちをいただくなど、
生かされているいのちであることに感謝する

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃんが肉にならんと、お正月がこんで、じいちゃんのいわすけん。みいちゃんば売らんとみんながくらせんけん。ごめんねえ。」

これは絵本「いのちをいただく」の一場面です。「女の子がみいちゃんと共に育てていた牛のみいちゃんを、年越しの家計のために売らなければならぬ」という実際にあったお話が、食肉加工センターで働く坂本さんの体験談として絵本に描かれています。

トラックの荷台で、牛のお腹をさすりながら話しかける女の子の姿を見てしまった坂本さんは、牛のみいちゃんを食肉へと加工することにためらいを覚え葛藤します。会社を休むことも考えましたが、葛藤の末に仕事場へ向かい、女の子と同じように牛に話しかけお腹をさすりみいちゃんと心を通わせました。ついに牛のいのちを取る瞬間、坂本さんは初めて牛の涙を見ました。

数日後、みいちゃんが坂本さんの元を訪ねて、みいちゃんのお肉をすこしもらって帰って家族で食べたこと、お孫さんの女の子が最初はお肉を食べなかつたことなどを話します。

「みいちゃんに、ありがとうといって食べてやらな」

とおじいちゃんが言うと、女の子は泣きながら

「みいちゃん いただきます」

「おいしかあ おいしかあ」

といてみいちゃんのお肉を食べました。

私は朗読塾「チーム一番星」にてこの絵本のおじいちゃん役として朗読する機会があります。北海道で開催された全国保育大会でもおじいちゃん役として朗読に参加しました。

仲間と共にこの絵本を朗読する度にたくさんのことを学び・思い出させてもらいます。いのちをいただくという言葉はいたいたいいのちへの「ありがとう」と「ごめんさい」という意味が込められていることなど。大切でありながら忘れがちなことを教えてもらいます。おじいちゃんの役ではいつも迷うセリフがあります。それは食肉加工センターからもらって帰ったお肉を家族でいただく場面なのですが、セリフの最後に、

「孫は泣きながら…食べました」

という場面があります。

「食べる」「食べました」普段は何気なく使う言葉ですが、この場面では特にその意味を深く考えさせられるのです。受け止めきれないような気持ちが溢れてきて、どのような心持ちでこのセリフを朗読すればよいのか迷い続けています。そして迷うと同時に忘れていた食材（いのち）への「ありがとう」「ごめんね」の気持ちが膨らみます。

「ありがとうといえる子どもを育てる」というまことの保育目標は、もしかするとどこにもありません。保育目標に聞こえるかもしれません。しかし見えない世界や、普段は知らない世界を思いながら「ありがとう」と言えたら素晴らしいね。という目標はなかなか巡り会えません。まことの保育の現場は、「ありがとうの種」をさがす日々でありたいと願っています。見えないものが見えた時、「ありがとう」が増えると同時に、子どもたちの世界が深く豊かなものになっていくでしょう。

まことの保育の願い

教育原理委員会 加藤泰和